〈太田至総編集　アフリカ潜在力 5〉
山越　言・目黒紀夫・佐藤　哲編『自然は誰のものか―住民参加型保全の逆説を乗り越える』京都大学学術出版会，2016 年，300 p.

鬼頭秀一 *

「野生の王国アフリカ」というキャッチコピーに代表されるように，アフリカはヨーロッパの植民地として野生生物の観光的なまなざしの消費地として扱われ，野生生物の保護の聖地としての位置付けがなされてきた．そこには，そこに住む人たちの眼差しは皆無であった．しかし，1990 年代以後，環境保護の枠組みが大きく変わり，野生生物保護の現場でそこに住む人たちのコミュニティの問題が取り上げられるようになった．住民参加型保全ということでさまざまな議論と実践が行なわれているが，このことについて，住民の生活の目線からこの問題を取り上げ，研究の対象とすることはなされていなかった．その中で，本書の編者でもある山越言とその影響を受けた日本人の若い人たちが，アフリカの地域研究のこれまでの大きな蓄積を背景として，アフリカの現地で，野生生物保護の問題とアフリカの地域社会の関係に関わる大きな課題に対して，そこに住む人たちの目線から，研究を始めた．彼らが主導してきた研究はひとつの重要な領域として育ち，アフリカにおける野生生物保護管理に関して，多くの成果を出し影響力を高めてきた．本書はその研究の 20 数年の集大成ともいえるものである．彼らがアフリカの各地で研究し，また政策的にも関わってきたことの成果が一覧できるような形で出版されたことは，大変意義深い．野生生物保護の問題は，それまで，現地出身の専門家が関わってきたとしても，理念的には欧米主導でなされてきており，それに対して対抗的に，地域の生活や生業，コミュニティ，文化，信仰に基づいてこの問題を実践的に考えていくための理念的な提示を行なったことは，学術的のみならず，野生生物保護管理の現場での実践性においても大変重要である．

第 1 部では，現在のアフリカにおける野生生物保護管理において課題になるいくつかの問題が検討されている．スポーツハンティングは，ジンバブエの CAMPFIRE の事例のように，観光で呼び込んだ海外の富裕層による狩猟による経済的な収益を環境保全や地域社会のために使うということで，環境と経済を両立させる優良事例として環境経済学の一部で称揚されているが，そこには，先進国の富裕層の狩猟が認められる一方で，地域社会の人たちの狩猟が制限されるなど社会的不公正の点などさまざまな倫理的問題があるということを，カメルーン等での地域研究で安田章人は明確に示している．象牙の問題は野生生物保護と地域住民との複雑な問題を提起している典型的な事例である．象牙がグローバルな経済の中で市場価値があることで，地域社会の人たちの野生生物利用の意味も変化していっている．西原智昭は，象牙という資源のそのような特質で，「森の先住民」の人た

* 星槎大学

ちが豊かに生きることの意味が，二重にも三重にもねじ曲がり，自然保護も先住民もステロタイプで捉えることができなくなっていることを指摘しているが，野生生物保護と地域での生業，さらにグローバルな経済との関係は深く考えさせられる．この問題に対する本質的な問題提起であろう．ギニア・ボッソウのチンパンジーの保全の問題を，宗教的な神聖なる森という概念を通して在来知と科学知との関係で捉えようとした山越言の画期的な研究は，後で論じる住民の主体と潜在力という意味もふくめて，保全における文化的な問題と政治的な問題を結びつけた重要な問題を提起している．

第 1 部全体では，「保全」「利用」「生活・生業」「参加」「主体性」ということがそれぞれがお互いに深く関係しており，ステロタイプ的な「保全」や「地域に根ざす」ことを再検討することが必要であることが示され，その意味で，野生生物保護管理の領域に大きな問題提起をしている．しかし，これらの地域研究に基づく研究の貢献はそれにとどまらない．長年にわたる研究の蓄積は，現地でのさまざまな利害関係者の具体的な関係性に基づく「対話」をどのように実現していくべきかという実践的な試行も行なっている．

第 2 部では，「住民参加型保全」という概念に対して改めて再検討を行なっている．「参加型自然保護」については，目黒がコラム 2 で簡単にサーベイしているように，さまざまなバリエーションがある．本書全体においても，各章でそれぞれの時代と事例の中でさまざまな用語として用いられており，読む方は混乱する部分があるが，コラムに沿った形で改めて考える必要がある．

「参加型自然保護」が導入され始めた状況から現在に至るまで，岩井雪乃は，タンザニアのセレンゲティ国立公園で，それを住民の視線に立って，住民参加型保全の「参加」を標榜する 2 つの事例を検証している．その 2 つは共に住民主体の保全を目指すと標榜しつつも，結果的には，「手段としての住民参加」としか機能しなかったことを明らかにしている．それと対比的に彼女が現在積極的に行なっているのはアフリカゾウによる農作物被害を防ぐための対策のための住民との協働であり，その中で外部者の関わりのあり方も模索している．その試みは，20 年以上継続して関わっていることで，「参加」という理念的な問題を地域研究の枠組みの中で問い続けたことの帰結としての実践的な問題提起であろう．松浦直毅も關野伸之も対象の自然は異なるものの住民参加やコミュニティ主体型自然資源管理について検討して現在の問題点を明確にしている．松浦の場合は，多様な住民が存在していることを前提にした，多様な関わり方を想定した協働のあり方についての問題提起であり，關野の場合は，人々が対話を通じて形成される場がそこでの信頼関係構築へ果たす意義である．「参加」ということ自体を組み替える必要性を改めて感じさせられる．

最後の第 3 部では新しい位相の保護管理とその中での「住民の参加」との関係について展望しようとしている．アフリカにおいては，要塞型の環境主義的な保全は 1990 年代に地域住民を配慮した形の保全に転換されたが，

その中で，国立公園の民営化や国際観光産業の進展を背景としたエコツーリズム開発に代表される新自由主義的保全のあり方が登場してきた．西﨑伸子は，保全とビジネスの融合を展開する際に強制移住等，従来型のアプローチと変わりないようにみえる形で地域住民に十分な配慮を欠いて失敗したことを示したうえで，それと対比的に，コミュニティを野生生物保護区の管理の重要な利害関係者として位置付け，住民に自然資源へのアクセスを認めつつ，住民がもっている資源利用に関わる知を保全の仕組みの中に取り込む優良な試みを紹介している．都会化し希薄になってきたものの，地域住民の自然利用で関わってきた知識をもとに彼らが主体的に関わるあり方に期待し，「創られてきた境界」を微修正させるような現場レベルでの交渉プロセスこそがアフリカの地域住民の人たちの潜在力に基づいた保全のあり方であるとして提起している．目黒紀夫は，ケニアにおけるマサイ・オリンピックという興味深い事例を紹介して，現地の人たちの文化的アイデンティティの現代的な展開のあり方について展望している．コミュニティ主体といいつつも，伝統的な文化が観光の眼差しの中で恣意的な形で切り取られて「伝統的」な「文化」として市場の中で消費されていくことは多々散見されるが，そうではなく，伝統文化を現地の人たちが主体的に組み替えていく新しいあり方について議論している．マサイ・オリンピックでは，競技種目が「伝統的な戦士の技能」に基づいていることが強調される一方で，ライオンの狩猟を「受け入れられない文化」として捉え，それを明確に批判しているのが興味深い．「伝統」や「文化」というものを受動的にさまざまな外部の眼差しで切り取られたものではなく，内容については現代的に変容させつつも，それを担う「主体」をも創り出すことで「コミュニティ主体」の保全に新たな方向性を作り出したということで意味がある．

最後の終章は，3 人の編者が，本書で展開された多様な事例を，自然保護管理の実践におけるアフリカの「潜在力」の役割という，このシリーズの重要な主題に統合し，住民の「参加」，「コミュニティ主体」ということに対しての，今後の展望について明確に述べている．ギニア・ボッソウの精霊の森とそこに生息するチンパンジーの保全の問題に 20 数年関わり続け，現地の人たちが外部からの保全に基づく干渉に対して自ら森を伐採することである意味で逆説的にもみえるような抵抗を示したことに，保全における「主体」の問題と「潜在力」の源泉を見て取った山越言，マサイ・オリンピックという「伝統文化」の創造的組み替えに，現代的で未来志向の「主体」と「潜在力」を示した，この研究領域では最若手に属する目黒紀夫，そこに，自らはマラウィ湖の海洋生物の保護管理からこの領域に入り，土着的知識に基づいたローカルな地域のステイクホルダーによる土着的知識体系と科学的知識のダイナミズムの中で地域環境学的なアプローチで，この領域を牽引してきた佐藤哲が加わり，本書全体を見通すような良いまとめと結論を引き出している．

「住民参加」ということが標榜されるものの「手段としての参加」にとどまることで，

結果的により抑圧的な状況が生み出されることも多い．その中で，「目的としての参加」をどう実現するのかがさまざまなところで課題になってくる．その際に，そのような抑圧的な状況を，現地の人たちを弱き被害者として捉えるのではなく，現地の主体の潜在力を評価することの重要性が提起されている．彼らに自然資源へのアクセスを確保し，今までの権利を保障することで，近代的な生活に移行する中で切れ切れになっている自然資源に対するローカルな知識体系を再構築させるようにしていくことは当然であるが，「保全」ということからは一見矛盾し，理解不能にもみえる伐採等の行為という抵抗の仕方にも注目し，その中にこそ，逆説的ではあるが，現地のアフリカの人たちの主体性と「潜在力」を読み込むことも，また，自然資源に対するローカルな知識体系を再構築するだけでなく，マサイ・オリンピックのように，その伝統的な内容を現代的に組み換えることのしたたかさの中に「潜在力」を見出すのも今までにない視点であり重要である．

さらに「住民参加」という枠組みによる対話の場ができることをそこで議論を終えるのではなく，そこから議論を始めるべきだという問題設定をしている．本書の各章で論じられてきた詳細な地域研究で試行されているのはまさにそのことである．長年にわたる現地での丁寧な調査に基づく地域研究の，錯綜してなかなか見えにくい，現場での交渉プロセス全体が問題解決の回答のひとつになる．「住民参加」がこじ開けた「アリーナ」という表現がその本質を物語っている．そこにこそアフリカの「潜在力」が機能する場があるということである．

本書全体としては，アフリカにおける自然保護管理における，今までの歴史と現在の到達点について，詳細な地域研究のフィールド調査に基づいた大変重要な問題を提起している．しかし，本書が示しているのは，それにとどまらず，自然保護管理に関する新しい枠組みの理念でもある．

また，「住民参加」「コミュニティ主体」という普遍的な問題にも適切な問題提起をしている．「合意形成論」に代表されるように，「参加」ということが手段として用いられて，地域住民の主体性が，政治的な権力の中や，市場経済の中で，客体として捉えられて，「民主的」な決定のひとつの駒としてしか機能させられず，住民自体も資源として消費されていることは枚挙にいとまがない．本書は，それに対して，「参加」という場の形成で終わるのではなく，「目的としての参加」を実現するためにこじ開けられた「アリーナ」での交渉プロセスこそが本質的であるという重要な問題提起もしている．「アフリカ」の「自然保護管理」に限定されないさまざまな領域で検討され読まれるべき基本的文献であるといえよう．